

過敏性體質ト結核(其ノ三)

「ツベルクリン」皮膚過敏性ノ體質的要約ニ 就テノ臨牀的統計的研究

(昭和16年1月12日受領)

大阪市立刀根山病院(院長 岩佐大治郎博士)

苜 部 一 衛
勝 部 鎮 雄

(本論文ノ要旨ハ昭和15年4月第18回日本結核病學會總會ニ於テ演說セリ)

目 次

第1章 緒 論	皮内反應程度ト過敏性體質諸屬性トノ 關係
第2章 觀察材料並ニ觀察方法	
第3章 統計的成績	第3節 特ニ年齢31歳以上ノモノニ就テ觀タ ル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏 性疾患自己歴トノ關係
第1節 結核既感染健康者(看護婦)ニ就テ觀タ ル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏 性體質諸屬性トノ關係	第4章 考 察
第2節 結核患者ニ就テ觀タル「ツベルクリン」	第5章 結 論

第1章 緒 論

「ツベルクリン」反應程度ヲ規制スル要約ハ種々アル。第一ニ結核感染ノ時期(Phase)デアアル。即チ感染初期ニハ個體ノ如何ヲ問ハズ強反應ヲ呈スル傾向ガアル。第二ニハ個體ノ反應力ノ後天的ノ障礙デアアル。即チ結核及ビ他ノ諸般ノ疾病ノ發生並ニ進行ニ伴ツテ多ク減弱スル。第三ニ「ツベルクリン」反應ノ末梢效果器官ノ被刺戟性乃至反應性ノ變化デアアル。即チ充血ニ際シ強ク現ハレ貧血ニ際シ弱ク現ハレ、光線ノ一定照射ニヨリ強ク現ハレ一定照射ニヨツテ却テ弱ク現ハレル如キデアアル。併シコレヲ諸要約ヲ無視シ得ル場合ニ於テ而モ尙ホ個體ノ差異ガ認メラレル。コレハ個體ノ體質的要約ニ基クモノデアラウ。

「ツベルクリン」反應程度ノ體質的要約ニ就テハ從來餘リ研究サレテ居ナイ。K. Diehl 及ビ O. v. Verschuer 兩氏⁽¹⁾ハソノ雙生兒結核ノ研究ニ於テ、「ツベルクリン」反應ノ相似性ハ二卵性雙生兒群ニ於ケルヨリモ一卵性雙生兒群ニ於テヨリ著明ナリト云ツテ居ル。コノ事實ハ「ツベルクリン」反應程度ニハ遺傳的因子ガ關係スルコトヲ物語ルモノデアアル。併シ兩氏ハ未ダ如何ナル遺傳基質ノ上ニ如何ナル「ツベルクリン」反應性ガ成立スルカニ就テハ論及シテ居ナイ。K. Klare⁽²⁾ハソノ所謂 exsudativ-lymphatische Konstitution ヲ述ベル際ニハ「ツベルクリン」反應強陽性ヲソノ一屬性トシテ擧ゲテ居ル。併シソノ根據ヲ明カニシテ居ナイヤウデアアル。

余⁽³⁾モ曩ニ過敏性體質ト結核トノ關係ヲ論ズルニ當リ、「ツベルクリン」反應強陽性ヲ以テ過敏性體質ノ一屬性トシタ。併シソノ根據ニ向ツテハ未ダ充分ナル檢討ヲ加ヘテ居ナカッタ。

抑々「ツベルクリン・アレルギー」ハ結核病機ヲ理解シ結核免疫ヲ論ズル際ニハ最も重要ナル事象ノ一ツデアル。而モソノ「ツベルクリン・アレルギー」ノ本態ヲ究明スル一ツノ鍵デアルトコ

ロノソノ體質的要約ニ向ツテハ從來殆ンド考慮ガ拂ハレテ居ナカッタヤウニ見エル。余ハ「ツベルクリン」反應程度ト結核抵抗性トガ密接ナ關係ヲ有スル事實ヲ知り、ソレハ「ツベルクリン」反應程度ガ個體ノ一般反應性ニ依存スルカラデアラウト推定シ、之ヲ立證スベク茲ニ「ツベルクリン」反應程度ノ體質的要約ヲ追究スルニ至ツタノデアル。

第 2 章 觀察材料竝ニ觀察方法

觀察材料ハ結核既感染健康者ト結核患者トニ互ル。結核既感染健康者トシテハ昭和 14 年刀根山病院ニ勤務中ノ看護婦 147 人竝ニ職員 47 人ヲ用ヒ、結核患者材料トシテハ昭和 14 年 4 月ヨリ 12 月ニ至ル間常病院ニ收容シタモノ 792 人ヲ用ヒタ。「ツベルクリン」反應術式ハ、傳染病研究所製ノ舊「ツベルクリン」原液ヲ 0.5% 石炭酸加生理的

食鹽水デ 1 萬倍ニ稀釋シタモノヲ用ヒ、ソノ 0.1cc ヲ上膊内側ノ皮内ニ注射シタ。反應判定ハ注射後約 48 時間ニ於ケル注射局所ノ發赤ノ平均直徑ニ依リ、ソノ 6 mm 以上ヲ陽性トシ、31 mm 以上ヲ強陽性ト判定シタ。過敏性體質竝ニ其ノ屬性ニ就テハ「過敏性體質ト結核(其ノ一)」⁽³⁾デ述ベタ如クデアル。

第 3 章 統計的成績

第 1 節 結核既感染健康者(看護婦)ニ就テ觀タル「ツベルクリン」

皮内反應程度ト過敏性體質諸屬性トノ關係

結核既感染健康者(看護婦)ニ就テ「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質諸屬性トノ關係ヲ觀ルニ、(第 1 表)ノ如ク「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質屬性陽性度トハ輕度ナガ

表 健康看護婦ニ就テ觀タル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質諸屬性陽性トノ關係

過敏性體質屬性	過敏性疾患 家族歴	過敏性疾患 自己歴	皮描反應 強陽性者(++, +)	粘膜炎 充血度者	
「ツ」皮内反應程度	147人	39人=27%	59人=40%	112人=76%	21人=14%
強反應(31mm以上)	35人	11人=31%	15人=43%	28人=80%	5人=14%
弱反應(30mm以下)	112人	28人=25%	44人=39%	84人=75%	16人=14%

ラ平行的關係ヲ示シテ居ル。皮膚描畫反應ノ如キ現症の屬性ニシテ而モ「ツベルクリン」皮内反應トソノ末梢效果器官ヲ共通ニスルモノニ於テソノ平行的關係ノ證明サレルコトハ敢テ異トスルニ足ラナイガ、過敏性疾患家族歴乃至自己歴ノ如キ病歴の屬性ニシテ而モソノ末梢效果器官

ヲ必ズシモ等シウシナイモノニ於テモソノ平行的關係ガ證明サレルコトハ甚ダ注目スベキ事實トイフベク、コレニヨツテ明カニ「ツベルクリン」皮内反應程度ハ過敏性體質ト密接ナ關係ヲ有シテ居ルコトガ想像サレル。

第 2 節 結核患者ニ就テ觀タル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質諸屬性トノ關係

結核患者ニ就テ之ヲ觀ルニ、(第 2 表ノ如ク) 性陽性度トハ結核患者ニ於テハ健康者ノ場合ヨリモ著明ナ平行的關係ヲ示シテ居ル。(過敏性

第 2 表 結核患者ニ就テ觀タル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質諸屬性トノ關係

過敏性體質屬性	過敏性疾患 家族歴 陽性者	過敏性疾患 自己歴 陽性者	皮 描 反 應 強陽性者(++,+) 充 血 者	粘 膜 充 血 度 充 血 者
「ツ」皮内反應程度	792人 66人=8%	121人=15%	297人=38%	146人=18%
強反應(31mm以上)	65人 6人=9%	18人=28%	42人=65%	25人=38%
弱反應(30mm以下)	727人 60人=8%	103人=14%	255人=35%	121人=17%

疾患家族歴ニ就テハソノ陽性例ガ非常ニ少イノデ統計的ニハ云々スルコトハ出來ナイ。)健康者ノ場合ヨリモ何故ニ平行的關係ガ著明ニナツタノデアラウカ。既ニ「過敏性體質ト結核」(其ノ一)⁽³⁾ニ於テ述ベタヤウニ、過敏性體質ヲ有スル個體ニ於テハ之ヲ有セヌ個體ニ於ケルヨリモ結核病機ハ良性ニ經過スル傾向ガアルシ、又「過敏性體質ト結核」(其ノ四)⁽⁴⁾ニ述ベル如ク、結核病機ガ良性ナ場合ハ然ラザル場合ヨリモ「ツベ

ルクリン」反應程度ハ強イ傾向ガアルノデアル。即チ過敏性體質ヲ有スル個體ハ結核ニ罹患シテモ病機ガ比較の良性デ從ツテ「ツベルクリン」反應程度モ比較の保持サレルガ、過敏性體質ヲ有セヌ個體ハ病機ガ比較の良性デナク從ツテ「ツベルクリン」反應程度モ減弱スル。ソレデ結局過敏性體質ノ存否ニヨル「ツベルクリン」反應程度ノ差等ガ結核罹患ニヨツテ一層著明ニ現ハレルト解釋スベキデアラウ。

第 3 節 特ニ年齢 31 歳以上ノモノニ就テ觀タル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性疾患自己歴トノ關係

一方「ツベルクリン」反應ハ結核感染新鮮期ニ於テハ一般ニ強ク、從ツテ今ソノ個體差ヲ問題トスルニ當ツテハ、此ノ感染新鮮期ニ屬スルモノハナルベク避ケタ方ガヨイ。他方過敏性體質ノ最モ本質的ナ屬性タル過敏性疾患自己歴ハ年齢ノ進ムト共ニソノ内容ガ益々豊富トナルベキコトハ理ノ當然デ、從ツテ今過敏性體質ノ有無ヲ問題トスルニ當ツテハ、潜在性ノ過敏性疾患ノ素質ガナルベク顯現シタ後ニ於テ觀察シタ方ガヨイ。即チ結核感染新鮮期ヲ避ケ、且ツ過敏性疾患病歴ノ有無ノ分化ノ充分行ハレタ如キ材料ニ就テ、「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質トノ關係ヲ見タ方ガヨイ。ソコデ今假ニ年齢 31 歳以上ノモノヲ選ンデ之ヲ觀察スルコト

ニシタ。初メニ健康者ニ就テ見ル。看護婦ニ於テハ 147 人中 31 歳以上ニ屬スルモノ僅カニ 6 人ニ過ギナイカラ、材料ヲ別ニ新ニ求メタ。即チ當病院勤務ノ男子職員ニシテ 31 歳以上ノモノ 47 人ニ就テ觀察シタ成績ハ次ノ(第 3 表)ノ如ク

第 3 表 年齢 31 歳以上ノ男子職員ニ就テ觀タル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質屬性トノ關係

過敏性體質屬性	過敏性疾患 自己歴 陽性者
「ツ」皮内反應程度	47人 23人=49%
強反應(31mm以上)	24人 15人=63%
弱反應(30mm以下)	23人 8人=35%

豫想ノ如ク、全體トシテノ過敏性疾患自己歴陽

・性者ノ率ガ看護婦ニ就テ觀察シタ場合ヨリモ更ニ高クナツテ居ルノミデナク、更ニ注目スベキコトハ「ツベルクリン」反應ノ程度ノ差異ニ伴フ過敏性疾患自己歴陽性者ノ率ノ差等ノ開キガ第1項ノ看護婦ニ就テ觀察場合ヨリモ非常ニ顯著ニナツテ居ルコトデ、即チ適當ナル材料ニ由ツテ觀察スルトキハ益々「ツベルクリン」反應程度ト過敏性體質陽性度トノ平行的關係ノ極メテ密接ナルコトガハツキリシテ來ルノデアル。次ニ結核患者ニ於テモ31歳以上ノモノノミニ

就テ觀察スルニ、(第4表)ノ如ク

第4表 年齢31歳以上ノ結核患者ニ就テ觀タル「ツベルクリン」皮内反應程度ト過敏性體質屬性トノ關係

過敏性體質屬性	過敏性疾患自己歴陽性者
「ツ」皮内反應程度	220人 47人=21%
強反應(31mm以上)	20人 10人=50%
弱反應(30mm以下)	200人 37人=19%

矢張前述ノ健康者ノ場合ト全ク同様ナルコトガ認メラレタ。

第4章 考察

過敏性體質ハソノ屬性ニヨツテ始メテ具體的ニ把握サレル。屬性トシテハ過敏性疾患家族歴、過敏性疾患自己歴、皮膚描畫反應及ヒ粘膜充血度ヲ選ンダ。前二者ハ病歴的屬性デアリ、後二者ハ現症の屬性デアル。過敏性疾患家族歴ハ過敏性體質ノ遺傳型(Genotypus)ヲ視フ示標デアリ、後三者ハソノ現象型(Phänotypus)ヲ示ス特徴デアル。後三者ノウチ過敏性疾患ハ主トシテ先天的基質ニ依存スルモノデアルガ、後二者ハ後天的ノ内外環境ノ支配ヲ受ケ易イモノデアル。從ツテコノ四ツノ屬性ノウチデ過敏性體質ノ本質的ナ部分ヲ形成スルモノハ過敏性疾患自己歴デアルト見ラレル。從ツテ今「ツベルクリン」反應程度ト過敏性體質トノ關係ヲ追究スルニ當ツテハ、過敏性疾患自己歴ガ最モ重要ナ役割ヲ演ズルコトニナル。而ルニ第3章ノ統計的觀察ノ結果、「ツベルクリン」反應程度ハ他ノ屬性トモ平行的關係ニ在ルノミナラズ又コノ過敏性疾患自己歴トモ平行的關係ニ在ルコトガ明ラカニナツタ。コノ成績カラ、「ツベルクリン」反

應程度ト過敏性體質トハ密接ナ關係ニ在ルト云ヘル、換言スレバ、過敏性體質ハ「ツベルクリン」反應程度ヲ規制スルニ要約ヲナシテ居ルト云ヘル。

「ツベルクリン」反應程度ノ強弱ヲ規制スル要約ハ緒言ニモ之ヲ述ベタヤウニ他ニモ種々アルノデアルガ、併シコノ體質的の要約ハ最モ本質的のモノト見ルベキデアル。何トナレバコノ體質的の要約ハ他ノ諸要約ニ先行シ且ツ他ノ諸要約ニ比シ安定的デアルカラデアル。

「ツベルクリン」皮膚過敏性ガコノ過敏性體質カラ本質的の規制ヲ蒙ツテ居ルトスレバ、「ツベルクリン」皮膚過敏性ガ結核性機轉ト又密接ナ關係ヲ有スルデアラウトイフコトガ想像サレルワケデアル。何トナレバ既ニ「過敏性體質ト結核」(其ノ一)⁽³⁾ニ於テ論ジタヤウニ過敏性體質ハ結核性病機ヲ良性ニ規制スルカラデアル。(而シテ上述ノ想定ノ果シテ當レルヤ否ヤハ次ノ「過敏性體質ト結核」(其ノ四)⁽⁴⁾ニ論述スルコトニスル)

第5章 結論

「ツベルクリン」皮膚過敏性ハ勿論他ノ種々ナル要約ニヨツテ規制サレテハ居ルガ、本質的のニハ過敏性體質ニヨツテ規制サレテ居ルトイフコトヲ知ツタ。

終リニ臨ミ前院長太繩博士ニ敬意ヲ表シ、院長岩佐博士竝ニ副院長波邊博士ノ御校閲及ビ同僚諸氏ノ御助言ヲ感謝スル。

(昭和15年12月29日記ス)

引用文獻

1) K. Diehl u. O. v. Verschuer, Zwillingstuberkulose. S. 443. Gustav Fischer, Jena 1933. 2) K. Klare, Anleitung zur Konstitutionsdiagnostik bei kindlicher Tuberkulose. S. 8. Georg Thieme, Leipzig 1937. K. Klare u. F. Böhning, Die offene Lungentberkulose bei Kindern und Jugendlichen. S. 71. Georg Thieme Leipzig 1938. 3)

苜部一衛, 「過敏性體質ト結核」. (其ノ一). 過敏性體質ト結核トノ相互關係ニ就テノ臨牀的統計的研究. 結核. 18卷, 4號, 211頁, 昭和15年4月. 4) 苜部一衛, 勝部鐵雄, 「過敏性體質ト結核」. (其ノ四). 「ツベルクリン」皮膚過敏性ト結核性機轉トノ關係ニ就テノ臨牀的統計的研究. 結核. 卷, 號, 頁, 和昭16年月.

dann 3 Studen lang im Brutschrank gelassen und filtriert. Die Blaufärbung wird im „Leifo“ mit Filter S 570 gemessen.

Die Formel für die Berechnung der Nukleinämiestärke ist folgende:

$$\text{Thymonukleinsäure mg/ccm} = f(E - E_0)v$$

Bemerkung:

$f = \text{Thymonukleinsäure mg/Extinktion}$	$E = \text{gefundene Extinktion}$
$E_0 = \text{Extinktion im Kontrollversuch}$ (0.009 bei Meerschweinchen)	$v = \text{Verdünnung der Lösung}$

Es wurde in einem besonders für die Verwertung dieser neuen Methode angestellten Experimente nachgewiesen, dass im Blutplasma der Meerschweinchen bei einer durch subkutane Einspritzung 10%iger Kochsalzlösung hervorgerufenen lokalen Nekrose eine zeitlich beschränkte, aber starke Zunahme der Thymonukleinsäure zu konstatieren war. (Autoreferat.)

Die reizbare Konstitution und die Tuberkulose.

3. Teil.

Klinisch-statistische Untersuchungen über die konstitutionelle Bedingtheit der Tuberkulinhautempfindlichkeit.

Von

Kazue Karibe und Sizuo Katube.

(Aus der städtischen Lungenheilstätte zu Osaka, Direktor: Dr. Daiziro Iwasu.)

Es ist offen, dass die Tuberkulinhautempfindlichkeit im Bezug auf die Tuberkelbazilleninfektion auftritt. Ob jedoch diese spezifische Hautempfindlichkeit auch besonders individuell konstitutionell bedingt ist, ist noch nicht wesentlich erklärt worden. Um dieses Problem zu lösen, haben Verff. eine Reihe der klinisch-statistischen Untersuchungen bei ca. 200 tuberkulös infizierten gesunden Menschen und ca. 800 tuberkulös erkrankten gemacht.

Wie Verff. schon in 1. Mitteilung erwähnt haben, kann man die reizbare Konstitution an ihren Attributen, d. h. Familienanamnese von allergischen Erkrankungen, Eigenanamnese von denselben, Dermographie und Hyperämie der Schleimhäute erkennen. Zwischen den positiven Ausfällen von diesen Attributen, insbesondere von der Eigenanamnese von den allergischen Erkrankungen und der Tuberkulinhautüberempfindlichkeit stellten Verff. in dieser Arbeit innige Beziehungen fest.

Aus diesem Ergebnis kann man sagen, dass die starke Tuberkulinhautempfindlichkeit durch die reizbare Konstitution individuell bedingt ist. (Autoreferat.)